

〈研究ノート〉

園での音楽表現活動の在り方についての一考察 ～幼稚園教育要領に基づいて～

諸井サチヨ

(2020年1月31日受理)

要 旨

養成校の音楽指導においては、ピアノ演奏に着目した指導がほとんどであるが、実際の保育現場で子どもと関わるために、ピアノの演奏技術、弾き歌いの技術だけで充分なのだろうか。幼稚園教育要領でも示されているように、本来、園での音楽表現活動では、子ども自身が「楽しむ」という事が重要であり、正しい音程で歌ったり、間違えずに正しく楽器を演奏したりするものではないということである。現在、園で実施されている音楽表現活動は、デイリーの歌唱が主であるが、音楽発表会や鼓笛隊など、大がかりな音楽活動を取り入れている園も多い。「楽しむ」ということでなく、発表のために間違えずに演奏することやしっかり取り組むことを指導しているのであれば、それは子ども主体の表現活動になっているとは言えない。今回の研究からは、本来、園での音楽表現活動は子ども主でなされるべきで、正しい音程で歌うことや楽器を正しく演奏することだけを指導しているのであれば、それは間違った方向性であるということが分かった。さらには、保育者自身が日常の些細な美しい音に敏感でなければならぬし、子どもたちが表現する姿を見守り、受け止め、認め、そして一緒に「楽しむ」ことこそ、一番重要であることが確認された。養成校の役割としては、ピアノの演奏技術ばかりに着目した指導ではなく、学生自身の感性も刺激できるような内容にしていくべきだということが示唆された。

キーワード 幼稚園教育要領、領域「表現」、音楽表現活動、子ども主体

はじめに

1

保育者養成校における音楽の授業では、ピアノの演奏技術の習得に終始しがちである。実習や保育現場でほとんどの場合、「弾き歌い」をおこなわなければならない、ピアノ初心者がピアノを弾くだけでなく、歌いながら弾くという、ピアノを弾くだけよりさらに難易度の高い技術を必要とするため、ピアノの指導が優先されることは仕方がないことである。

ピアノの演奏技術習得のために、バイエル等の教則本を導入し、幼児歌曲の弾き歌いと並行

して指導している場合は、実際に保育現場で必要となる幼児歌曲が弾き歌いできるようになるまでには、教則本を取り入れていない場合に比べると、より多くの時間が必要となる可能性もある。そのため、養成校での短い学びの中では、ピアノの演奏技術習得だけで時間切れとなり、指導者側も学生側もピアノがある程度弾けるようになれば充分という認識に陥りがちである。要因としては、保育者養成校での学びの短い期間では保育に必要な幼児歌曲をピアノで問題なく弾けるようになることが優先されるからだと言える。

だが、子どもと関わり、音楽表現活動を行う事を考える時、本当にピアノの演奏技術だけで充分と言えるのだろうか。ピアノが弾ければそれで充分なのだろうか。幼児歌曲の弾き歌いできれば、子ども主体の音楽表現活動が出来るのだろうか。幼稚園教育要領の『表現』では、「感じたことや考えたことを自分なりに表現することを通して、豊かな感性や表現する力を養い、創造性を豊かにする。」¹⁾と書かれてある。そのねらいや内容を考えた時、本来、園での音楽表現活動で必要とされているものは何なのか。どのような活動をするべきなのか。ただ、毎日同じ曲を繰り返し歌うことだけでいいのだろうか。練習にかなりの時間を要する大がかりな音楽活動は本当に必要とされているのだろうか。このような疑問が生じてくる。本研究では幼稚園教育要領をふまえ、領域「表現」のねらいと内容、その中でも音楽に関係する部分に焦点をあて、園活動で必要とされている表現活動、その中でも音楽表現活動の在り方について検討してみたいと思う。

I. 先行研究の検討

保育者養成において、音楽分野で数多く研究されているのはピアノ演奏技術に関するものである。Ciniiで、検索語「幼稚園+ピアノ」では、100件以上が検索できる。主には、養成校で学ぶピアノが初心者学生への指導方法や現状についてであり、保育現場で必要となる子どもの歌や行事の歌等の弾き歌い技術を短期間で習得するにはどのように指導していけばいいのか、というものである。

このようにこれまで多くの研究者が保育者養成において、ピアノ初心者にどのようにアプローチし、ピアノを演奏のみだけでなく「弾き歌い」を保育現場で問題なくできるようにするかということを研究してきている。確かにS大学短期大学部でも入学者の7割程度がピアノ演奏に関して、いわゆる「初心者」と呼ばれる部類に入るレベルの学生であるため、ピアノの指導にはかなり苦勞している。

ピアノに関しては日々の練習量も技術上達に大きく影響してくるため、進度状況に個人差がはっきり表れてしまう。実習においても保育現場においても必須であるピアノの演奏技術を短い期間で習得させることは相当難しい。さらには、ピアノの授業（音楽の授業）自体、週に1回程度であり、指導の難しさは言うまでもない。

そのため、研究においてもピアノ指導に偏りがちになっていることは理解できる。多くの養成校で、取り扱い教材を研究したり、クラス分けをレベル別で工夫したり、学生へアンケートを実施したりしながら、指導が続けられている。

実習の段階からピアノの弾き歌いは必須事項であり、養成校で学ぶ学生の初心者の割合が多い現状では、効率よくピアノの演奏技術を習得することは優先課題であるだろう。実習段階から必要となると1年目から実習に出るため、入学後数ヶ月で簡単な曲は弾けるように訓練しておかなければならない。このような状況からも音楽の分野での研究がピアノの指導に集中していることがわかる。

しかしながら、幼稚園教育要領のねらいと内容に基づいて実施する活動等についての研究は数少ない。例えばCiniiで検索語「幼稚園＋領域＋音楽表現」で調べてみると14件のみである。検索語「幼稚園＋音楽表現活動」で調べてみても13件のみであった。このように、ピアノの指導についての研究は積極的にされているにも関わらず、幼稚園教育要領のねらいと内容をふまえた音楽表現活動についての研究は数少ないことがわかる。

II. 領域「表現」

幼稚園教育要領第2章、ねらいの内容の『表現』については以下の通りである。

この中から特に音楽に関係する部分について具体的に考えてみたい。音楽に関係することとして、内容の(1)(4)(6)が挙げられるだろう。

ねらい

- (1) いろいろなものの美しさなどに対する豊かな感性をもつ。
- (2) 感じたことや考えたことを自分なりに表現して楽しむ。
- (3) (3)生活の中でイメージを豊かにし、様々な表現を楽しむ。

内容

- (1) 生活の中で様々な音、色、形、手触り、動きなどに気付いたり、感じたりするなどして楽しむ。
- (2) 生活の中で美しいものや心を動かす出来事に触れ、イメージを豊かにする。
- (3) 様々な出来事の中で、感動したことを伝え合う楽しさを味わう。
- (4) 感じたこと、考えたことなどを音や動きなどで表現したり、自由にかいたり、つくったりなどする。
- (5) いろいろな素材に親しみ、工夫して遊ぶ。
- (6) 音楽に親しみ、歌を歌ったり、簡単なリズム楽器を使ったりなどする楽しさを味わう。
- (7) かいたり、つくったりすることを楽しみ、遊びに使ったり、飾ったりなどする。
- (8) 自分のイメージを動きや言葉などで表現したり、演じて遊んだりするなどの楽しさを味わう。

内容の取扱い

- (1) 豊かな感性は、自然などの身近な環境と十分にかかわる中で美しいもの、優れたもの、心を動かす出来事などに会い、そこから得た感動を他の幼児や教師と共有し、様々な表現することなどを通して養われるようにすること。
- (2) 幼児の自己表現は素朴な形で行われることが多いので、教師はそのような表現を受容し、幼児自身の表現しようとする意欲を受け止めて、幼児が生活の中で幼児らしい様々な表現を楽しむことができるようにすること。
- (3) 生活経験や発達に応じ、自ら様々な表現を楽しみ、表現する意欲を十分に発揮させることができるように、遊具や用具などを整えたり、他の幼児の表現に触れられるよう配慮したりし、表現する過程を大切に自己表現を楽しめるように工夫すること。

図1

(1)について、幼稚園教育要領解説には「幼児は、生活の中で、例えば身近な人の声や語り掛けるような調子の短い歌……様々なものに心を留め、それに触れることの喜びや快感を全身で表す」、(4)については、「幼児は、感じたり、考えたりしたことを身振りや動作、顔の表情や声など自分の身体そのものの動きに託したり、音や形、色などを……自分なりの方法で表現している」²⁾と解説されている。

そして特に直接的に関係している(6)については、「幼児は、一般に音楽に関わる活動が好きで、心地よい音の出るものや楽器に出会うと、いろいろな音を出してその音色を味わったり、リズムをつくったり、即興的に歌ったり、音楽に合わせて身体を動かしたり、ときには友達と一緒に踊ったりしている。このように、幼児が思いのままに歌ったり、簡単なリズム楽器を使って遊んだりしてその心地よさを十分に味わうことが、自分の気持ちを込めて表現する楽しさとなり、生活の中で音楽に親しむ態度を育てる。ここで大切なことは、正しい発声や音程で歌うことや楽器を正しく上手に演奏することではなく、幼児自らが音や音楽で十分遊び、表現する楽しさを味わうことである。そのためには、教師がこのような幼児の音楽に関わる活動を受け止め、認めることが大切である。また、必要に応じて様々な歌や曲が聴ける場、簡単な楽器が自由に使える場などを設けて、音楽に親しみ楽しめるような環境を工夫することが大切である。一方、教師と一緒に美しい音楽を聴いたり、友達と共に歌ったり、簡単な楽器を演奏したりすることも、幼児の様々な音楽に関わる活動を豊かにしていくものである。このような活動を通して、幼児は想像を巡らし、感じたことを表現し合い、表現を工夫してつくり上げる楽しさを味わうことができるようになる。さらには、教師などの大人が、歌を歌ったり楽器の演奏を楽しんだりしている姿に触れることは、幼児が音楽に親しむようになる上で、重要な経験である。このように、幼児期において、音楽に関わる活動を十分に経験することが将来の音楽を楽しむ生活につながっていくのである。」³⁾と解説されている。

まず、日々の生活の中で、例えば自然の雨、風の音、小動物の鳴き声、人の声、そういったもしかしたら気づかないかもしれないような様々な音に気づき、刺激を受け、反応し、それらを楽しむことが大事だということが語られている。

保育者は、忙しい生活の流れの中や騒がしい環境の中でそれらの音に気付くことはできるだろうか。もし、子どもたちがそういったものに気付いて感じていても、その様子に保育者が気づけず、受け止めることもできないとどうなるのだろうか。せっかく子どもたちが彼らの目線、感覚で気づいた音、感じたことを伝え、表現しようとしても、友人や保育者と共有、共感することがなければ、その感覚がだんだんと消えてしまうだろう。解説にも書かれているように、「何よりも幼児を取り巻く環境を重視し、様々な刺激を与えながら、幼児の興味や関心を引き出すような魅力ある豊かな環境」⁴⁾を作っていくことが重要である。

また保育者が、日々の保育にゆとりをもちながら、子どもたちが何かを感じてそれを主体的に表現しようとする様子を急かさずに、温かい気持ちで見守ることが大切であるということだ。

さらに、子どもたちが様々なものから刺激を受け、それらを表現しようとする時、その表

現方法がどんな小さなものであってもそれを受け止められるだけの感覚や感性が保育者側にも必要ということだ。大勢を保育する中で、子どもひとりひとりの表現を感じて受け止めることは時間的には困難ではあるかもしれないが、子どもは認めてもらったり、共感してもらったりすることで安心や喜びを感じるため、大人である保育者側も日常から感覚を研ぎ澄ませておくことが大切になってくる。

Ⅲ. 子ども主体の音楽表現活動について

ここまでで幼稚園教育要領の領域「表現」、その中でも音楽に関係する箇所を考えてきたが、園での実際の音楽表現活動を考えてみたい。

園では音楽表現活動として、日常の歌唱があげられる。歌唱活動はほとんどの園で行われている。朝の会の歌、お弁当の歌、お帰りの歌はもちろんのこと、その他にも季節の歌や行事の歌を取り扱っている園が多い。この歌唱活動については、日々の生活の中に溶け込んでおり、ネガティブな感じ方をしている子どもは少ないのではないかと推察される。

ただ、毎日毎日、同じ曲を繰り返し歌い、保育者が「元気よく」歌うように促すと曲の雰囲気はそっちのけで最大限大きな声で歌ったり、叫ぶように歌ったりしてしまう。このような歌唱によって、感性を刺激したり、働かせたりすることができるのかは疑問が残る。

毎日歌うことで子どもたちにとっては大変親しみのある曲になり、歌いやすくなるが、その反面、感動や初めて楽曲に触れる時の気持ちがうすれがちで、保育者もデイリーの曲目については、朝の会、お弁当、帰りの会での流れでしか捉えなくなるのではないだろうか。時間的なことに追われて、曲に相応しくないテンポで伴奏をしている場合もあるだろう。これでは、やはり、感性を養うための活動にはならない。

また、日々の活動以外に、園では、音楽発表会やお遊戯会、園独自の活動としての鼓笛隊など、特に集団での練習が相当必要な活動が多く取り入れられている。最終的には保護者等に「見せる」ためのものである。そのため、ある程度のレベルに引き上げておくことが重要になってくる。合奏や鍵盤ハーモニカの練習のために、外部から音楽専門のスタッフを招いて指導が実施されている園も少なくないだろう。

保育者は本来の音楽表現活動ではなく、保護者に見せる「カタチ」にするための指導をしてはいないだろうか。先の研究でのアンケートでわかったことだが、園で経験した自身の音楽表現活動の記憶として、「楽器の演奏は間違えると怒られて、楽しくなかった」や「うまくできなくて苦労した」という思い出が残っている場合もある。このことを考えると、特に発表を控えているような活動では、保育者自身も時間的な余裕がなくなり、ある程度の出来栄を気にしてはならないため、本来あるべき活動とは離れてしまう。辛かった気持ちや思い出だけが残るような関わり、活動は避けなければならないという事が言える。

実際には、「楽器を正しく上手に演奏することではなく、幼児自らが音や音楽で十分遊び、表現する楽しさを味わうこと」⁵⁾と書かれているように、楽しむことが必要なのである。それも子どもたちが自ら楽しさを味わうことが重要なのである。そのため、一人でも「辛い」「間

違ってはいけない」等とネガティブな感情を持つ子どもが出てしまえば、その音楽表現活動は方向性が違っているということになるのではないかと考えられる。表現活動を行う際、保育者は、正しい発声や音程で歌うことや楽器を正しく上手に演奏することではないという事を常に心に留めていなければならない。

集団での音楽表現活動を実施する場合は、お互いが出す音を聴き合ったり、一緒に歌うことでハーモニーを感じ合ったり等、他の表現を感じて認め合う事の方が重要である。

この点を忘れてはならない。

IV. 保育者の関わり方

では、音楽表現活動を提供する保育者はどのように関わっていけばいいのだろうか。

日々の保育で多忙を極めている中、余裕を持って表現活動を運営していくことは可能なのだろうか。朝の会、お弁当、帰りの会等、日常の保育で取り入れられている歌唱活動はルーティン化され、毎日ほぼ同じ曲を繰り返しているため、次から次に曲をこなしているだけになっている可能性も否定できない。実際、これら、デイリーの歌に関しては、何年もの間、ほとんど同じ曲が使用されていて、見直されないままであるため、保育者自身がその曲に対してどのような思いで取り組んでいるのかが問題になるのではないか¹。

保育者自身が日常の自然の音、美しい音、子どもたちが奏でる表現に気付ける感性をそなえていなければならないということである。しかしながら、感性はある日突然生まれてくるものでもなければ、感性を手に入れようとして身につくものでもない。日常生活の中で様々な芸術等に触れることで養われていくものである。些細な自然の音、虫の声などに耳を傾けることができているだろうか。保育者は、それらのことをよく理解した上で子どもたちと音楽表現活動を行っていかなければならないのだ。

また、保育者にとっては、子どもたちが主体的に表現したのを感じ、見守り、受け止め、認める事が大切なのだ。そして一緒に「楽しむ」という事が最も大切であるということである。

また保育者自身がその表現活動を楽しみ、美しい響きを奏でられれば、子どもたちもそれを模倣したいと思い、保育者自身が楽しんでいる姿を見ることで子どもたちも一緒にやってみたいと思うものなのではないかと考えられる。

V. まとめ

今回の研究では、幼稚園教育要領に基づき、園での表現活動、特に音楽表現活動について検討した。園では保育者が弾き歌いをしながら子どもたちと一緒に歌う場面が多い。毎日同じ曲を繰り返し歌うことが多い園生活では、子どもたちの感性を刺激し、自ら主体的に表現したいという意欲を保育者がどのように引き出すかが重要となってくる。保育者自身の感受性が未熟であれば、子どもたちの表現を感じ、受け止めることもできない。

「内容の取扱い」に新たに、豊かな感性を養う際に、風の音や雨の音、身近にある草や花の形や色など自然の中にある音、形、色などに気付くようにすることが示されており、日常の自然界の音に気付くことも重要となった。保育者自身がそれに気づいて、子どもたちと感動を共有していかななくてはならないということだ。

子どもたちを教え導く前に、保育者自身の感受性や感性が非常に重要であるということが問題となり、今後の養成校での指導にも、ピアノ指導だけでなく、自然界の音に耳をかたむけ、何かを感じ取れるような取り組みが必要であることが明らかとなった。

保育者養成校で学ぶ学生が、将来、現場に出た時に、上手に歌う事や間違えずに楽器を演奏する事を目標とした音楽表現活動にならないためにも、養成校の学びの間に、子ども主体の音楽表現活動について理解しておかなければならない。

養成校で表現、特に音楽表現を担当する教員は、子どもたちが主体的に意欲を持ち、取り組んだ表現を保育者がしっかり受け止め、一緒に楽しめるような表現活動を展開し、お互いの演奏や表現を認め合い、共感し合えるような活動が提供できる保育者を育てていかななくてはならない。

引用文献

- 1) 幼稚園教育要領 文部科学省 p20 チャイルド本社 平成29年告示
- 2) 幼稚園教育要領 文部科学省 p20-p21 チャイルド本社 平成29年告示
- 3) 幼稚園教育要領解説 文部科学省 p240 フレーベル館 平成30年
- 4) 幼稚園教育要領解説 文部科学省 p240 フレーベル館 平成30年
- 5) 幼稚園教育要領解説 文部科学省 p240 フレーベル館 平成30年

参考文献

- (1) 幼稚園教育要領 文部科学省 平成29年告示
- (2) 幼稚園教育要領解説 文部科学省 平成30年3月
- (3) 無藤隆 幼児期の終わりまでに育ってほしい10の姿 東洋館出版社 2018年
- (4) 無藤隆 3法令改訂(定)の要点とこれからの保育 チャイルド本社 2017年
- (5) 吉永早苗 子どもの音感受の世界 萌文書林 2016年
- (6) 加藤あや子他 生活経験や自然体験を通した幼児期の音楽教育の重要性に関する一考察 大阪教育大学 2019年
- (7) 中村礼香 表現活動を通して育まれる資質・能力：音楽表現活動に視点をあてて 鹿児島女子短期大学紀要 2018年
- (8) 小林洋子 保育者に必要な音楽指導：幼稚園教育要領を考える 四條畷学園短期大学紀要 2017年

注

- 1 園によってはクラス毎に選曲を変えている場合もある。